

2016.9.21 すばる小委員会 議事録

日時：2016年9月21日（水）午前11時より午後4時

場所：国立天文台三鷹すばる棟 TV 会議室（ハワイ観測所、京都大学、広島大学、ソウル大学、ハワイ大学と Zoom 接続）

出席者：大朝由美子、柏川伸成、鍛冶澤賢、土居守、成田憲保、松下恭子(14:00～)、宮田隆志(12:45～)、安田直樹、山村一誠（以上三鷹）

有本信雄、岩田生(12:45-14:30 中座)（ハワイ観測所から Zoom 接続）

石黒正晃（ソウル大学から Zoom 接続）

吉田道利（広島大学から Zoom 接続）

栗田光樹夫（午後、京都大学から Zoom 接続）

Guenther Hasinger 氏（午前中のみ、UH IfA から Zoom 接続）

欠席：児玉忠恭、田中雅臣、長尾透、村山卓

書記：(英語部分)安田直樹（日本語部分)吉田千枝

====今回の A/I 及び議論サマリ=====

- ・ MK 高校生プログラム・ベトナム訪問・Keck Science Meeting 参加・オーストラリア訪問・ダウンタイムの開放・EAO 時間への応募状況・アジア冬の学校+すばるの学校の台湾開催について所長報告があった。
- ・ 遊休赤外検出器譲渡委員会の委員候補者を決定した募集後、申請者を見てから観測所から就任依頼を出す。
- ・ 今年度のすばる UM の世話人をハワイ観測所小野寺仁人氏、三鷹新納悠氏、高木悠平氏、SAC から土居委員、大朝委員、田中委員、柏川委員長に決定した。日程については 1/10-1/12 に決定した。
- ・ 非サーベイ型観測時間の確保については 9/26-の光天連シンポジウムで議論するが、S17A から約 5 年間は一般共同利用時間（時間交換も含む）が全夜数の 40%以上となることを目標とする。
- ・ Keck からジョイントプログラムの提案があったが、UM に連続して国内研究会の開催を検討するなど、継続審議事項とする。
- ・ HSC SSP の生データの公開は、解析済画像・カタログのデータ公開と同期させるために、通常の 18 か月後の公開から半年以内の遅れで公開することを目標にする。HSC SSP の中間審査の時期と方法については来年 2 月の最初のデータリリース後を目途に、次回の SAC で検討する。

- ・ 来年 3 月の国際共同運用サイエンス WS の開催日は、オーストラリアほかと協議して確定するが、世話人はハワイ観測所の児玉氏、美濃和氏、大橋副所長、三鷹研究員の新納氏、高木氏、SAC から吉田道利氏、長尾氏に依頼する。
-

1 Report from Director (Arimoto)

1.1 Maunakea Scholar

High school student program to use telescopes at Maunakea.

Subaru will contribute 2hours / year from DDT.

Other telescopes will contribute 2hours - 1night.

Kashikawa: Do student write proposals?

Arimoto: Yes.

Kashikawa: Can Japanese high school student apply?

Arimoto: Basically yes. But it is not advertised.

Somebody: Super Science High School would be appropriate.

Arimoto: We need a good teacher who could actively work on.

1.2 Vietnam

Collaboration between NAOJ and Vietnam

Some representatives visited Vietnam.

Workshop to promote astronomy in Vietnam was held.

There are ~10 PDs and no graduate school.

They own 40cm telescope.

Their interest is shifting from optical to radio (VLBI).

1.3 Keck-Subaru Synergy Meeting

Keck director proposes to have a workshop in California as a follow-up of last year's Sendai meeting to discuss enhancement of collaboration.

8 (UC) + 8 (Subaru) + 6 (Caltech) + 1 (NASA) + 1 (UH) people will be joined.

Discussion will be limited to 2-3 specific fields.

Keck-side proposes to increase the number of nights for time-exchange from 10 nights / year to 20 nights / year.

Half of them will be used for collaborative research.

n The current plan for collaborative research is 50 nights in 5 years from both

telescopes.

1.4 Australia

In August, Arimoto, Minowa and Iwata visited Australia and had discussion at several representative institutes.

At Dept. of Industry, Arimoto and Minowa met Australia government representatives with people from AAL, AAO, and ANU.

There was a technical workshop in Mt. Stromlo. AAO, ANU and others explained their instrumentation activities. Subaru has explained about ULTIMATE-Subaru and PFS.

Agreed to make a list of possible work items to initiate collaboration.

Adaptive Optics is a strong collaboration case.

But there is no official agreement yet.

Subaru conveyed Japanese community's concern about the speed of partnership progress.

AAL agreed not to progress too fast.

More details will be discussed in Subaru users meeting.

Kashikawa: Is there possibility they will join PFS SSP?

Iwata: Australia has a strong interest in PFS. Subaru is under discussion with PFS collaboration how Subaru partners can join PFS SSP.

Iwata: I asked them to come to SAC/NAOJ in November for further discussion.

1.5 Telescope down time

Mirror hatch repair needs some down time in S17A.

Primary Mirror re-coating will be at Oct-Nov 2017 or sometime in 2018.

Yoshida: How much time was expected for mirror hatch repair?

Iwata: Aug, Sep, and Oct was expected. Only preliminary works has been done.

Currently we investigate repair work schedule, but at least extra 2 weeks downtime in S17A are expected.

Probably a few days for a few times.

Yoshida: I concern about mirror surface.

Iwata: HSC data shows some degrade of reflectivity.

1.6 EAO time in S17A

14 EAO proposals (21.7 nights) were submitted for 3 nights allocation.

They are currently being reviewed by referees.

There was some confusion between EAO web and Subaru web.

In October, EAO board meeting will be held.

Subaru will propose 3 nights for S17A and S17B.

1.7 Asia winter school

Aoki, Ohashi, Minowa and Imanishi at NCU Taiwan.

Students from Korea and China are also joined.

Data reduction of HSC/HDS/MOIRCS(imaging) are explained.

2 Future plan for HSC SSP (Iwata)

Future night allocation plan for HSC SSP was explained.

8 nights / month (HSC run) is needed to complete HSC SSP by S19A.

From S19B, PFS wants to start SSP.

Doi: What is the conflict with other SSP?

Iwata: IRD and PFS may conflict. There is a policy SSP will not exceed

25% of total usable nights.

Total useable night is ~115 nights / semester.

25% of this is ~30 nights / semester.

Kashikawa: Will HSC SSP request more nights?

Iwata: Weather factor is already included and Subaru's policy tells no compensation for telescope/instrument troubles. So I believe there is little possibility for extra request.

Iwata: Can we change the policy of 25% nights?

Arimoto: When the policy was created, there was no plan for PFS.

Hasinger: Partner should be included in SSP.

Iwata: We need discussion with SSP team.

Hasinger showed great image of planetary nebulae taken by HSC.

3 赤外検出器譲渡委員会について

SAC 委員長による経緯説明：

ハワイ観測所にある余剰赤外検出器を有効利用するため、貸出・譲渡の仕組みを作ろうとしている。公平を期すため、希望者にプロポーザルを出していただき、審査委員会が審査を行い、評価も行う。SAC は審査委員会の人選を依頼されている。前期 SAC による推薦の申し送りがあるが、ほかにも適任者があれば推薦していただきたい。審査委員は 5 人ぐらいでどうか？

C：審査委員候補者は、申請者になりそうな人が多いので、ご自身が申請するかどうか聞きながら依頼することになりそうだ。

Q：審査基準も審査委員が決めるのか？

A：観測所のほうで、「科学的意義だけでなく、グループの発展性、教育的効果、検出器を入手する財源の有無など幅広い観点から検討する」としている。

C：提案書にサイエンスも書くのなら、広い視野から見ていただける人も必要だ。

SAC 委員長：SAC 委員からも一人入って頂きたい。

[結論] 赤外検出器譲渡委員会の委員候補者を決定した。

Q：(公募は国内のみに出すが) 海外からの応募も可能とある。輸出入規制があると思うが。

A：観測所はその難しさについては認識している。

4 すばる UM について

SAC 委員長：今年度の UM は来年 1 月に三鷹大セミナー室で開催することに決め、

会場の仮押さえもしているが、日程と世話人を決定したい。

日程は 1/10,11,12 か 1/24,25,26 だ。

C：大学関係者は 1/10-のほうありがたい。

SAC 委員長：世話人は例年ハワイの若手と三鷹の研究者、SAC から数名で務めている。

[結論] UM 開催日は 1/10-12 とし、世話人はハワイ観測所小野寺仁人氏、三鷹新納悠氏、高木悠平氏、SAC から土居委員、大朝委員、柏川委員長に依頼する。

(後日注：田中委員にも世話人を依頼した。)

5 非サーベイ型観測時間の確保について

所長：このテーマについては 9/26-の光天連シンポジウムで吉田道利さんから話していただき、議論することになっている。その前に少人数での議論も行っているが、SACの皆さんのご意見をいただきたい。

吉田氏：少人数で議論した際のサマリが手元にあるが、非サーベイ型観測というのはトランジェント観測、ToO観測、モニター観測、フォローアップ観測、院生教育、萌芽的観測等だ。サーベイ型への移行を決めたすばるで、それらをやっていくためにはどうしたらよいか？という議論だ。

Q：それは HSC,PFS (+ULTIMATE) 以外の装置も必要だという話なのか、あるいは装置を HSC,PFS に特化していくが、その中でサーベイ以外のものも、ということなのか？

A：両方含んでいる。皆さんの意見はさまざまだ。HSC でサーベイやっているときに突然トランジェント天体の観測をやりたい、というケースもありうる。

C：以前、非サーベイ型観測は時間交換を使うという話だったが。

C：Keck で分光時間を確保していても、「GRB が出たから分光したい」という日本人の要望は通らないだろう。

C：Gemini では ToO 観測が可能だ。

C：が、世界共通の alert になっているものはできない。

C：PFS で GRB 観測をするのでは残りのファイバーがもったいないという意見もあった。

所長：Keck では一日 2 時間の観測をずっと入れるなどしているの、我々も準備したほうがよい。

C：すばるは同一夜内での装置交換はできないと思うが。

所長：はい、装置交換しないでやれるものだけだ。

Q：サーベイと個別観測の割合の資料はあるか？

A：以前岩田副所長が SAC で示したものがある。明夜は半分ぐらい個別観測に使えるが、暗夜はほとんど使えない。今後衛星計画とのタイアップなどで SSP が増えるとまた状況が違ってくる。

所長：アイデアはいろいろあるが、我々はその都度どれかを選ばなければならない。選ぶためにも案はいろいろ出しておいたほうがよい。

C：意見表明がされないと全部がサーベイという方法に流れていってしまう。

C：個人的には分光観測をなくすのは困るので、残してほしい。観測時間だけでなく、観測装置の維持が大変だと思うが。

吉田氏：観測所の装置デコミッションプランも同じ資料に含まれている。

ナスミス装置は生き残るが、このままだとカセグレン装置はなくなってしまう。カセグレンにどういう装置を残すか。

C：MOIRCS はよい装置だし、性能も向上したので何とか残してほしい。

所長：MOIRCS は ULTIMATE のカメラになる。

吉田氏：カセグレンの可視分光器はどうか？FOCASの機能は時間交換に任せるのでいいのか？PFSが来ると、カセグレンは改造しなければならないようだが。

安田委員：カセグレンにメトロロジーカメラを置くが、取り外しはできる。PFSを使うときだけつける形だ。

C：運用負担が少ないよう、装置の数を絞っていく必要があるが、多様なニーズがあるので簡単でない。

Q：Keck/Geminiの装置で全部カバーできるのか？

C：Keckの装置プラン等よくわからないし、偏光機能がない。

SAC委員長：時間交換を当てにしていると、先方がデコミッションすると困る。

宮田委員：COMICSも他の中間赤外装置がなくなっているの、ぜひ残してほしい。

惑星関係のニーズはあるし、探査機ミッションとの合同観測ではCOMICSは重要な役割を担う。

C：TAO+MIMIZUKUでどのくらいカバーできるのか？

宮田委員：ある程度はできるが天域が異なるし100%ではない。CanariCam(GTC)はあまり性能が出ていない(10ミクロンはまずまずだが、20ミクロンは天候的に厳しいと聞いている)。

COMICSがなくなると20ミクロンの装置は世界になくなる。

C：観測所が維持できるなら維持していただくとして、FOCASはどうするか？

C：残すべきなのはわかるが、どうやってそれを実現するか？

C：GMOSは当面維持するそうだが。

C：一方で、Gemini/Keckから分光装置がなくなるのなら、そういう時代だというとならえ方もある。

Q：PFSでも個別観測はできるのか？

A：余剰ファイバーをもったいないと思わなければ可能だ。

吉田氏：HSC/PFS時代の疑似プロポーザルを出してもらって検討してはどうか。

サイエンスはどんどん新しいものが出てくる。

[結論]非サーベイ型観測時間の確保については光天連シンポジウムで改めて議論する。

6 Keckとの連携について

所長：KeckのLewis所長からKeck/すばるのジョイントプログラムの提案があった。

時間交換を拡大し、年12夜は従来通り個別観測に使い、それとは別に年10夜5年を使って(計Keck50夜、すばる50夜)ジョイントプログラムを実施したい。それについて協議する合同WSを早めに関きたい、とのことだ。この件は観測所的美濃和さん、小山さん、児玉さんに担当していただくが、SACで議論していただきたい。

SAC 委員長：Keck との連携については、2 年ほど前から議論していたが、去年仙台で連携 WS を開催した。おおまかな枠組みについて質問・意見があればお願いします。

Q：すばるの夜数を使うことは決まっているのか？

A：決まっていない。時間交換を大規模に拡大する提案だ。

Q：特定の分野での連携プログラムとのことだが、これまで時間交換でやっている分野なのか？

A：分野についてはまだ何も決まっていない。

所長：話を知っている人だけが加わるのではなく、オープンにして、学生・ポスドクを育てていくようなプログラムにしたい。Keck 側から来た連携提案だが、日本はこういう風に進めたいと提案すればよい。頑張って Keck と対等にやれるようにしたい。

Q：HSC や PFS とどう関係するのか？

SAC 委員長：SSP のフォローアップ等は難しいだろう。去年の仙台での合同 WS では、日本側はフォローアップ分光をしたいようだったが、既定のコラボレーションの問題があり難しい。新たにジョイントプログラムを立ち上げほうがいいのかもしれない。今後の検討事項だ。

C：SSP と別にしたほうが話はすっきりする。

C：この件は非サーベイ観測時間をまた圧迫する要素になる。Keck と対等にやればマイナスにはならないが、上手に進めないとすばるが使われるだけになる。

Q：現在も Keck とは年間 10 夜ぐらい交換しているのか？

TAC 委員長：セメスタによって異なるが、平均するとそれくらいになる。

C：Keck 側が合同 WS への参加人数を指定している（すばる 8 人、Keck 側 16 人）のはおかしい。先方の人数が多い。

所長：それはパサデナで開催するので地の利があるためだ。仙台で開催した際は逆にこちらの人数が多かった。

Q：ジョイントプログラムのテーマは一つに絞るのか？

所長：これからの議論だが、二つぐらいではないか。

SAC 委員長：5 年では時間がかかりすぎる。2 年間ぐらいのほうがよいのではないか？

所長：来年 3 月はオーストラリアとの連携 WS があるので、Keck とは 2 月ごろでないか？
こういう方向の連携を認めていただければ、後は数人の WG で検討して Keck と相談したい。

SAC 委員長：仙台でもジョイントプログラムの案は出ていたし、すでに共同研究しているチームもある。

Q：皆さん応募してください、とするのか、知っている人が加わるのか？

所長：Keck 側は大体参加者を決めてしまうようだ。

岩田副所長：Keck は private telescope のようなものなのでそれでもよいが、すばる側はだめだ。

所長：日本国内研究会を開いて検討したい。最大 5 年 50 夜だが、2 年 20 夜が 2 件でもよい。

SAC 委員長：1 月が UM, 2 月に Keck との会合となると年内に国内での協議をするしかないが。

所長：UM に連続して開催する方法もある。

C：Keck 側はすでにやりたいことが決まっているように見える。

SAC 委員長：Keck コミュニティは強力なので、我々にとって連携の意味がなくなるしないよう、注意して進める必要がある。

所長：我々も連携の進め方を学んでいく必要がある。

C：論文著者数を双方半々にするなど、あらかじめ条件を設定する必要がある。

吉田氏：我々のコミュニティに Keck を使いたい人がどれだけいるかが問題だ。そして対等にやれるようにすべきだ。我々は共同利用施設なので、一部の人が Keck 側と仲良くなって進めるのはだめだ。手続きとしては、新たなインテンシブプログラムではないか？彼らは Keck の UC 時間を使えばよいだけなので全然違う。

岩田副所長：S17B は現実問題として無理だ。

C：Keck 側は HSC を使いたい。それと Keck の装置を組み合わせたいサイエンスをやりたい、ということではないのか？

吉田氏：基本的にそうだ。

所長：Keck はこれまではこういう言い方をしなかった。ジョイントプログラムで一緒にやろうというのは、以前こちらから提案したことであり、それに先方が合わせてきている。

C：ジョイントプログラムがどこかで審査されるプロセスがあるとよい。

SAC 委員長：両方の TAC に採択される必要がある、などと決める必要があるが、今後の連携をどう推進するか？

所長：国内研究会で実際の観測提案のプレゼンをしてもらうなどどうか？

SAC 委員長：これまでの議論で、Keck との連携には 3 つの柱があった。

1. 時間交換の拡大
 2. ジョイントプログラム
 3. 装置開発
- このうちの 2 つを先方から提案してきたことになる。

岩田副所長：装置開発に関する連携案も出したが、反応がなかった。先方にとって魅力がなかったのかもしれない。

[結論]Keck との連携については継続審議とする。UM に連続して国内研究会を開く等検討する。

7 HSC SSP 時間とデータリリースについて

7.1 SSP 時間の上限について

岩田副所長：

S19B から PFS SSP が始まると予想されるので、HSC SSP との重複を避けて一般共同利用時間を確保するため、HSC SSP のセメスタ当たりの夜数を増やし、S19A までに終わらせるようにしたい。

午前中の英語の議論でも取り上げたが、SSP を導入する際、SSP 夜数は共同利用時間の 25% を超えない、となっていた。夜数だとセメスタあたり 30 夜だが、複数の SSP が走ることになるとその枠をどうしても超えてしまう。この枠を取り除くのか、あるいは新たに設定するのか？

SAC 委員長：SSP が一般共同利用を圧迫することについてご意見を伺いたい。

安田委員：HSC SSP は開始当初はセメスタ 5 夜ほどだったので、平均すれば 25% に収まるのではないかと？5 年で 300 夜の予定だったが遅れている。それをさらに延ばすのは困る。

Q：岩田副所長の 6 月の望遠鏡時間シミュレーションにその後変更はないか？

岩田副所長：大きくは変わらないが、このシミュレーションは S19B まで HSC SSP があると想定して行った。

C：S19B に共同利用時間がほとんどなくなる予想だった。

岩田副所長：そのため HSC SSP を前倒して実施する案を出した。また、以前の案とは主鏡蒸着の時期がずれる。

C：UH の使用を今後同じように続けていくのか、という議論が以前あったと思う。

岩田副所長：(UH は年間 52 夜使用する約束になっているが) SSP に入ってもらって、その分 52 夜から減らすという案が出ていた。

C：その交渉を頑張ってほしい。その点がポイントになるのではないかと？

岩田副所長：UH が PFS をどう使いたいと思っているかはまだ聞いていない。

SAC 委員長：共同利用時間の 25% という制限をどうするか？

C：IRD SSP も提案されるので、現実に合わせて考えていくしかない。

Q：IRD, PFS も入れて、今後 10 年間でざっくり SSP が何パーセントになるのか？

岩田副所長：HSC SSP が S19B にかかった場合、3 件で 65 夜程度、55%。それがピークではないかと？

C：上限 25% だったものが 30% になる程度なら問題ないが、45% 超は問題になる。

C：制限がなし崩しになるのはよくない。

TAC 委員長：一般共同利用夜数が何夜程度あるかわかっていたほうがよい。

SAC 委員長：一般共同利用を最低何パーセント確保する、という言い方がユーザーにわかりやすいかもしれない。

C：時間交換も共同利用時間に含まれる(UH 時間は含まれない)。

C：ジョイントプログラムは別になる。

C：一般共同利用時間が 50%というのは現実には難しい。

C：共同利用何夜と規定してしまうと、衛星計画との連携が入ってくると難しい。

岩田副所長：S17A の夜数をどうするかは次の採択会議までに決める必要がある。

所長：すばるは TMT につなげるためサーベイ中心に舵を切ったが、その方針は世界で評価されている。その上で一般共同利用時間をどれくらい確保するか、という議論だ。SSP の上限 25%と決めた時点では HSC もまだできていなかった。覚悟を決めて現実的に決断するしかない。

Q：3つの SSP は同じプロセスで評価されたのか？

SAC 委員長：IRD と PFS の SSP はまだ公募していないので未確定だ。

Q：IRD に 8m の集光力が必要なのか？

SAC 委員長：その議論はまた改めて行う。

SSP のほうでなく、一般共同利用の割合を設定したほうがよい、という方向だが。

C：最低 40%程度だろう。4割は確保するといえよ。

岩田副所長：一番厳しい S19B でも一般共同利用時間 40%は確保できるのではないかと？

C：サイエンスの状況はどんどん変わるので、フレキシブルに対応していく必要がある。

SAC 委員長：今後 5 年間は一般共同利用時間が最低 40%確保（時間交換も含む）を目標にする。S17A から実施し、すばるをとりまく状況も変化するので約 5 年後に見直しを行う。パートナーの問題が今後あるが。

Q：PFS のコミッショニングは暗夜を使うのか？

岩田副所長：明夜でできるものは明夜で行う。

SAC 委員長：資料で示されている SSP の要求夜数とアサイン夜数にかい離があるが、この状況は改善できないか？ SSP をキューに移行してはどうか？

岩田副所長：S16B から SSP も一部キューに入れており、高優先度で準備を進めているが、それで全部は解決しない。

TAC 委員長：共同利用時間が最低 40%はわかるが、実際に何夜かは誰が決めるのか？

SAC 委員長：共同利用係が計算して TAC に依頼することになる。

岩田副所長：最近 HSC SSP になるべく 30 夜、残りが個別共同利用夜数という計算をしていたが、今度からは逆になる。利用可能な夜数の 40%が個別共同利用時間に確保され、その残りで SSP 夜数が決まる。

所長：SSP の中間審査を行うと夜数も変わるのでないか？

[結論] S17A から 5 年間は一般共同利用時間（時間交換も含む）が全夜数の 40%以上とすることを目標とする。

7.2 HSC SSP のデータリリースについて

岩田副所長：

2017年2月のカタログの公開に合わせて、生データの公開を行うことでSACに了解していただいたが、通常の18か月後の生データ公開とあまりかい離がないように、ということも言われている。来年2月公開分については、通常より4.2か月の遅れになる。今後2年ごとにpublic data releaseをすることと、(通常のデータ専有期間)18か月からあまり遅れないで生データを公開することはどうしても矛盾してしまう。3回目のデータリリースでは、通常より約1年遅れの生データ公開となる。その対策として、

<option1> 2回目のデータリリース後は生データを18か月後に公開する。この場合、
生データを勝手に解析される恐れがある。

<option2> 2回目のデータリリースの範囲を広げ、3回目のデータリリースの時期を半年早める(3回目のデータリリースの際の生データ公開の遅れを4.3か月に減らせる。
SSPチーム内の合意はまだできていない。)

を検討中だが、SACとして「(生データ公開が)通常より大きく遅れないように」というのがどの程度の範囲なのか伺いたい。

Q：データリリースをいつ行うかどうやって決めているのか？

SSPデータは全部そろっていないとサイエンスができないのか？

安田委員：最初のデータリリースを2017年2月と決めたので、単純に次はその2年後となっている。データは全部そろわないとだめなサイエンスと、一部でできるサイエンスとがある。広視野サーベイなので、時間で切る以外の切れ目がない。

C：2回目と3回目のデータリリースで扱う範囲をずらし、S18Aの最初のデータを2回目で公開するようにすれば、さらに遅れが減るのではないか？

安田委員：データリリースの直前はチームは大変な状況だ。

SAC委員長：<option2>で許容できないか？

岩田副所長：実際のデータの取れ方で多少変わってくる可能性はある。

SAC委員長：他のサーベイ計画はどうなっているかご存じの方は教えてほしい。

岩田副所長：SDSSの例を昨年ご説明したと思う。

安田委員：すばるのような期限は設けられていない。定期的にデータ公開を行った。

土居委員：もともとは期限があったが交渉の結果そうなった。

C：HSC SSPは2年分のデータを扱うので、誤差が大きいのは仕方ない。

SAC委員長：生データ公開の遅れが6か月を切ることを努力目標とし、1か月以内の細かい数字にはこだわらない、という方針でどうか？

所長：データリリースポリシーは必ず問題にする人がいるが、UMで説明するのか？

岩田副所長：HSC SSPのウェブページで説明する。

SAC委員長：SACとしては6か月遅れまでは許容範囲だ。

C：その分クオリティのよいデータリリースをするべきである。

岩田副所長：2017年2月28日に最初のデータリリースということで進めるが、中間審査のスケジュールも決めておいたほうがよい。

吉田前 SAC 委員長：これまでの SSP 中間審査は、午前中に公開で報告会を行い、午後に SAC 内の議論を行った。

SAC 委員長：中間審査は最初のデータリリースの後だと思うが、進め方を次回の SAC で相談したい。

[結論] HSC SSP の生データについては、通常の 18 か月後の公開から半年以内の遅れで公開することを目標にする。HSC SSP の中間審査については次回の SAC で検討する。

8 国際共同運用サイエンス WS について

SAC 委員長：開催候補日は 2017 年 3/6-3/8 か 3/22-3/24 だが、なるべく早めがよいので、とりあえず 3/6-3/8 とする。

岩田副所長：オーストラリアが参加できるほうの日程になる。

[結論] 来年 3 月の国際共同運用サイエンス WS の開催日は、オーストラリアと協議して確定するが、世話人はハワイ観測所の児玉氏、美濃和氏、大橋副所長、三鷹研究員の新納氏、高木氏、SAC から吉田道利氏、長尾氏に依頼する。

9 愛媛大学での SAC 開催について

SAC 委員長：各種予定があり、愛媛大学で SAC を開催できるのは 11 月か 12 月しかないが、11 月の SAC にオーストラリアが来る可能性がある。鍛治澤さんと委員長で協議して決めたい。

10 次回開催日確認

次回の SAC は 10 月 26 日（水）。

**** 資料 ****

- 1 遊休検出器の貸出・譲渡について
- 2 非サーベイ型共同利用時間の確保について
- 3 望遠鏡時間シミュレーション
- 4 Keck 所長からの連携提案
- 5 7/27 SAC 議事録改訂版